

〈新刊紹介〉

野林正路著

『詩・川柳・俳句のテキスト分析——語彙の図式で読み解く——』

単眼・一点透視の〈遠近法〉ではなく、複眼・多様性の〈遠近法〉である「語彙（志向）図式」で、魯迅の漢詩、川柳、芭蕉の発句を読み解く書。類義語や反義語、対比語や対義語、比喩語といった、類語の組み合わせからなる「語彙（志向）図式」によって、作品解釈を行う。和泉書院研究叢書 448 として刊行された。

「第1章 詩のテキスト構成と作者の実存——語彙（志向）図式で読み解く——」, 「第2章 川柳のテキスト構成——語彙（志向）図式で読み解く——」, 「第3章 芭蕉の発句のテキスト構成——語彙（志向）図式で読み解く——」, 「エピソード——語彙学を統一科学の開けの海へ——」。末尾に、「〈参考資料〉言語活動のモデル図——「構成意味論」から見た〈100〉——」と参考文献、索引を付す。

(2014年7月25日発行 和泉書院刊 A5判横組み 328頁 8,000円+税 ISBN 978-4-7576-0716-3)

澤田治美著

『現代意味解釈講義』

本書は、意味解釈について多様な角度から考察する書である。多義性、構造依存性、時間、視点、条件性、仮想性、モダリティ、コンテキスト、含意、言語行為、情報構造といった角度から、7部18章にわたって意味の問題にアプローチしている。

「第1部 意味解釈の可変性」は、「第1章 多義性」。「第2部 構造と意味解釈」は、「第2章 意味解釈における構造依存性」, 「第3章 照応」, 「第4章 比較構文」。「第3部 時間と意味解釈」は、「第5章 テンスとアスペクトから見た時点副詞類」。「第4部 視点と意味解釈」は、「第6章 日英語関係節のテンスと話者の視点」, 「第7章 再帰代名詞「自分」と話者の視点」, 「第8章 「たい／たがる」構文と話者の視点」。「第5部 条件性・仮想性と意味解釈」は、「第9章 条件文」, 「第10章 「could +完了形」構文」。「第6部 モダリティと意味解釈」は、「第11章 モダリティの体系と否定」, 「第12章 力動的 could と非実現性」, 「第13章 WILL BE V-ing 構文」, 「第14章 束縛的な must / have to と実現性」, 「第15章 認識的モダリティと因果性」。「第7部 コンテキスト・情報構造と意味解釈」は、「第16章 モダリティとコンテキスト」, 「第17章 情報構造と意味解釈」, 「第18章 コンテキストと意味解釈」。末尾に、「参考文献」, 「索引」を付す。

(2014年11月19日発行 開拓社刊 A5判横組み 528頁 4,800円+税 ISBN 978-4-7589-2207-4)

張志剛著

『現代日本語の二字漢語動詞の自他』

本書は、「二字漢語+スル」という構成をもつ二字漢語動詞について記述する書である。新聞をもとに自作したコーパスから用例を抽出し、その出現状況を調査することによって、それぞれの用例を「自動詞」「他動詞」「自他両用動詞」いずれかに分類する。また、構成要素の品詞性や要素同士の関係性を手掛かりとして、その自他を決める規則を明らかにする。調査に使用した二字漢語動詞の語構成・動詞の自他・旧日本語能力試験レベル等を一覧にまとめたエクセルデータ付き。

なお、本書の内容は博士論文（一橋大学大学院 2012 年度）を加筆修正したものである。「第 1 部 本研究の基礎データ」は、「第 1 章 序論」,「第 2 章 二字漢語動詞の選定と概観」,「第 3 章 二字漢語動詞の自他」,「第 4 章 二字漢語動詞の語構成」。「第 2 部 規則篇——二字漢語動詞の自他決定の規則——」は、「第 5 章 AV 型二字漢語動詞」,「第 6 章 VN 型二字漢語動詞」,「第 7 章 VV 型二字漢語動詞」,「第 8 章 その他の二字漢語動詞」。「第 3 部 個別篇——二字漢語動詞の自他と和語動詞との関連性——」は、「第 9 章 VN 型二字漢語動詞の「骨折」と「骨を折る／骨が折れる」」,「第 10 章 和語複合動詞と対応する VV 型二字漢語動詞の意味と自他」。「第 4 部 日本語教育への応用及び今後の課題」は、「第 11 章 日本語教育への応用のための基礎資料」,「第 12 章 今後の課題」。末尾に、「引用文献」,「参考文献」,「索引」を付す。

(2014 年 11 月 29 日発行 くろしお出版刊 A5 判横組み 198 頁 3,800 円+税 ISBN 978-4-87424-641-2)

小松英雄著

『日本語を動的にとらえる——ことばは使い手が進化させる——』

音韻、意味、文法といった言語を構成する要因が、密接不可分の一体として機能する、情報伝達の動態をとらえる立場から、日本語運用の特色を分析する書。民族主義的言語観による言語研究を批判し、世界の一言語として日本語を捉えなおす。

「序章 母語についての共通理解を検討する——民族主義から切り離して日本語をとらえる——」,「1 章 ニホンとニッポン」,「2 章 原日本語の姿をさぐる——ラ行音の諸問題——」,「3 章 濁音の諸相——二項対立が担う役割——」,「4 章 音便形の形成とその機能」,「5 章 係り結びの存在理由——自然な長文を組み立てられるようになるまで——」,「補論 日本語史研究のこれからのために」。末尾に、掲載図版一覧を付す。

(2014 年 11 月 30 日発行 笠間書院刊 四六判横組み 351 頁 2,400 円+税 ISBN 978-4-305-70753-6)

岸江信介・田畑智司編

『テキストマイニングによる言語研究』

本書は、テキストマイニングを援用し、言語分析を試みた論文集で、日本語学6本、英語学4本の論文からなる。アンケート調査による自由回答の分析方法、膨大なテキストデータに潜む真実を見つけ出す方法などを紹介している。ひつじ研究叢書〈言語編〉第121巻。

「序文(田畑智司)」,「雑誌『行動計量学』における言語に関する投稿論文の傾向——投稿論文の時系列変化と『計量国語学』論文との比較——(小野原彩香・矢野環)」,「KWIC検索システムを併用した国会会議録のテキストマイニング分析(中島浩二・吉田友紀子・岸江信介)」,「アンケート調査の発話回答から言語行動の傾向性を探る(西尾純二)」,「表現の「自然さ」の判断基準を探るテキストマイニング——「よろしかったですか」等の表現の「自然さ」についてのアンケートにおける自由回答を例として——(阿部新)」,「日本・韓国・中国における依頼に対する断り表現(瀧口恵子・米麗英・清水勇吉)」,「テキストマイニングで集約する読者の読み——読者がライトノベルに期待するもの——(村田真実)」,「接続詞は何を結ぶか——フレーム意味論に基づいた対応分析——(内田諭)」,「メタ談話標識を素性とするランダムフォレストによる英語科学論文の質判定(小林雄一郎・田中省作)」,「英日対訳コロケーションにおける「述語+目的語」の抽出手法の研究——パラレルコーパスを利用して——(後藤一章)」,「日本人英語学習者による関係詞の使用傾向(阪上辰也)」,「結びに代えて(岸江信介)」。

(2014年12月3日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 212頁 6,700円+税 ISBN 978-4-89476-695-2)

川戸道昭著

『資料集成 近代日本語〈形成と翻訳〉別巻 欧米文学の翻訳と近代文章語の形成——漢文対応の日本語から欧文対応の日本語へ——』

本書は、近代日本語は翻訳との遭遇によってその核心部分が形成されてきたとの考えのもと、表現者としての翻訳家に主軸を置き、従来の近代語形成資料を再点検したものである。明治期の文献から近代日本語の形成研究に有益な資料を集めて編集した川戸道昭・榊原貴教の編著者によるシリーズ『資料集成 近代日本語〈形成と翻訳〉』(全18巻、2014年11月から2016年に刊行予定)における「道案内」の役割を果たす。冒頭の口絵に「近代日本語形成史」16頁と、書き下ろし論考「欧米文学の翻訳と近代文章語の形成」,「史料集 欧米文学の翻訳と近代文章語の生成」,「年表 近代日本文体史(常体編)」を収める。

(2014年12月11日発行 大空社刊 A5判縦組み 318頁 20,000円+税 ISBN 978-4-283-01188-5)

今野真二著

『辞書をよむ』

現代の国語辞典、また『類聚名義抄』『色葉字類抄』『日葡辞書』『節用集』『和訓栞』『言

海』など各時代の代表的な古辞書を読み解き、連鎖する辞書の歴史を描く。平凡社新書760として刊行された。

「序章 辞書を概観する」,「第一章 現代の国語辞書」,「第二章 『日本国語大辞典』」,「第三章 明治時代の辞書」,「第四章 古辞書の初めに位置する『和名類聚抄』——中国語をいかに理解するか——」,「第五章 平安時代～室町時代に編まれた辞書」,「第六章 江戸時代に編まれた辞書」,「終章 辞書をよむ」。

(2014年12月15日発行 平凡社刊 新書判縦組み 184頁 800円+税 ISBN 978-4-582-85760-3)

古田東朔著、鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓編
『古田東朔 近現代 日本語生成史コレクション
第6巻 東朔夜話 伝記と随筆』

古田東朔の著作集の最終巻。本巻では、幕末以降の国語学史・国語教育史に関する伝記研究と、主に評伝を中心とし、回想や追悼文を含む随筆類を収録する。

「1 大庭雪斎」,「2 大庭雪斎訂補の『歴象新書』」,「3 大庭雪斎の業績」,「4 堀達之助と『英和对訳袖珍辞書』」,「5 柳河春三」,「6 福沢諭吉 その国語観と国語教育観」,「7 福沢諭吉その他補遺」,「8 古川正雄」,「9 田中義廉」,「10 田中義廉補遺」,「11 中根淑」,「12 「遠山左衛門尉」の登場 中根淑・依田学海の文章」,「13 大槻文彦伝」,「14 東朔夜話」,「15 芦田先生と私」,「16 西尾実先生の想い出」,「17 学習院高等科時代の小高さん」,「18 森山隆さんを悼む」,「19 原稿用紙の字詰」,「校訂付記」,「解説」,「解説——父・古田東朔の思い出——」。末尾に、「初出一覧」,「古田東朔 略歴」,「古田東朔 著述目録」を付す。

(2014年12月30日発行 くろしお出版刊 A5判縦組み 512頁 9,200円+税 ISBN 978-4-87424-642-9)

築島裕著

『築島裕著作集 第2巻 古訓點と訓法』

全8巻からなる築島裕の著作集の第2巻で、単行本に再録されていない論考のうち、古訓點と訓法に関するものを國書、仏書、漢籍に類分けして収める。沼本克明と土井光祐による校閲を経て、およそ発表順に掲載されている。

「古事記の訓讀」,「古事記序文の訓法をめぐって」,「萬葉集の古訓點と漢文訓讀史」,「萬葉集の訓法表記方式の展開」,「東洋文庫藏日本書紀推古天皇紀について」,「性靈集の古訓點についての寸考」,「天理圖書館藏三教指歸久壽點の和訓について」,「菅家文草の古訓法」,「來迎院本『日本靈異記』寸見一二」,「律令の古訓點について」,「東大寺圖書館藏本法華攝釋治承點」,「輪王寺天海藏金剛般若經集驗記古點」,「三十帖策子古訓點所見」,「正倉院聖語藏大智度論古點及び央掘魔羅經古點について」,「聖語藏大方廣佛華嚴經古點の調査研究について」,「飯室切古點寸考」,「大東急記念文庫藏三教治道篇保安

點」,「法隆寺本辨正論保安點」,ほか18本を収載。

(2015年1月14日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 736頁 20,000円+税 ISBN 978-4-7629-3622-7)

国広哲弥著

『日本語学を斬る』

日本語学における「定説」に疑問を呈して、新説を提示する書。近年大きな進歩を遂げている脳科学の見識を取り入れ、ソシユール理論の根本的欠陥をつき、日本語学の「定説」を斬るとともに、その新たな可能性を切りひらく。

「序章 言語観」,「第1章 日本語音素体系——ローマ字正書法を考える——」,「第2章 動詞形態論——動詞に活用体系は存在しない——」,「第3章 ル・タ・テイルについて——動詞語尾論——」,「第4章 ソの社交的転用法——指示詞の領域説から心的視点説へ——」,「第5章 ハとガについて——日本語に格助詞は存在しない——」,「第6章 ハ・ガについて——金田一説・久野説との比較検討——」,「第7章 語彙論と表現論」,「第8章 展望——これからの日本語研究に望むこと——」。末尾に、「あとがきに代えて——私が言語学の道に入るまで——」,「参考文献」,「索引」を付す。

(2015年1月30日発行 研究社刊 四六判縦組み 188頁 1,500円+税 ISBN 978-4-327-38469-2)

鈴木広光著

『日本語活字印刷史』

西洋式活版印刷術に内在する論理とのせめぎあいのなか、漢字と仮名による多様な書字活動が活字化される過程について描く書。技術のみならず、文字の性質や書記様式・言語生活等に注目し、嵯峨本など古活字版から、宣教師らによる明朝体活字の鑄造を経て、近代日本の活字組版まで、グローバルな視野で描きだす。主に、既発表論文に大幅な加筆を行った序章から第5章までと、書き下ろしによる第6章で構成されている。

「序章 活字の論理——日本語活字印刷史への視角——」。「第I部 古活字版のタイポグラフィ——活字・組版・異版——」は、「導論 漢字仮名交り文の古活字版を論じる理由」,「第1章 嵯峨本『伊勢物語』の活字と組版」,「第2章 古活字版の仮名書体」,「小括 古活字版と近世木活字版の間」。「第II部 漢字鑄造活字の開発——その歴史と背景——」は、「導論 終点としての起源」,「第3章 ヨーロッパ東洋学・聖書翻訳と漢字活字の開発」,「第4章 中国プロテスタント伝道印刷所の漢字活字」,「小括 そして、日本へ」。「第III部 近代日本における印刷表現様式の成立」は、「導論 明朝体活字の導入がもたらしたもの」,「第5章 開化の軋み——揺籃期の日本語タイポグラフィ——」,「第6章 テクストを分節するもの——句読法の意味——」,「小括 〈声〉の行方」。末尾に、「初出一覧」,「図表一覧」,「索引」を付す。

(2015年2月15日発行 名古屋大学出版会刊 A5判縦組み 356頁 5,800円+税 ISBN 978-4-8158-0795-5)